

仏心と葬弁儀

ーその14ー

さらに広がる「地域への恩返し」

昭和53年、丸和堂は釧路市から感謝状をいただくことができました。これは昭和43年の創業以来、3歳未満の幼児の葬儀における祭壇料を無料としたことや、生活保護世帯などの葬儀料を半額にしたことなど、企業としての地域社会へのささやかな貢献が認められたためと全社員が感激した出来事でした。また、この間も新たに、丸和堂が見送った物故者や無縁仏への法要を執り行うなど、葬儀社としての独自の姿勢が評価されたものとして、素直に喜び合うことができました。

また飛田は、昭和50年の春に丸和堂の所在地である町内会「花園親交会」の会長に選出されました。すでに軌道に乗っていた会社の業務は日曜も祝日もない、まさに多忙を極めるものですが、日ごろお世話になっている地域の人々に求められた以上、断る理由はありませんでした。

仕事への情熱に燃えていた若い飛田は、町内会活動にも積極的に取り組みました。もともと老人福祉に関心が高かったこともあり、特別養護老人ホームでおむつが足りないと聞くと、すぐさま町内の老人クラブを中心に「おむつ拋出運動」を呼びかけ、町内会事業の一環として各家庭にも協力を求めました。

苦勞が磨いた人間性

一方で、地域住民の暮らしに潤いを与え、子どもたちの情操教育にも役立ってほしいとの思いから「花いっぱい運動」を提唱し、自ら先頭に立って三十間道路や共栄橋通に花を植えるなどの活動を続けました。これらの事業は広く新聞などにも取り上げられ、活動の基盤を固めた花園町内会は、その後多くの輝かしい実績を積み重ねていくこととなります。

忙しい業務をこなすと同時に、これもまた日常的に多忙な町内会長の役目を果たすということは、はた目で見ているよりも大変な仕事です。しかし当時まだ若く、エネルギーに満ちあふれていた飛田を衝き動かしたのは、自分自身の存在、そして何より会社そのものが地域社会のお世話になっているという事実にはかなりませんでした。

「報恩」というと格好よすぎるかもしれませんが、貧しかった自らの少年時代や結婚後に愛児を失った悲しみ、裸一貫から始めた事業の苦勞を振り返ってみれば、他者の苦勞への共感や同情心も人一倍大きなものだったのです。それらが重なりあって初めて、飛田の行動力や社会性、ひいては人間性までも磨いてくれたのでした。

・つづく・

■次回の掲載は十月十七日(土)を予定しております。